

政務活動費 活動実績報告書

令和6年10月16日 古賀邦彦

件名	能登半島地震及び水害被災状況調査
使途	1 調査研究費 2 研修費 5 要請・陳情活動費
金額	円
期日	令和 6年 9月24日(火)～令和 6年 9月26日(木)
場所	石川県輪島市他
目的	能登半島地震及び水害被災状況を調査し、八女市における防災・減災の取り組みに活かす。
参加者	古賀邦彦、石橋義博、久間寿紀
概要	<p>○能登半島地震被災者共同支援センター（羽咋市石野町）訪問 対応：黒梅 明事務局長</p> <p>※黒梅氏より地震発生から今日までの状況や要望を聞き取る</p> <ul style="list-style-type: none">・元日の大地震により能登半島の志賀町から輪島市、珠洲市にかけての日本海側の海岸（外浦）は4～5m隆起。隆起したため津波が来たが被害は少なかった。逆に珠洲市から能登町、穴水町にかけての海岸（内浦）は地盤沈下し津波に襲われ大きな被害となった。・元旦で帰省した家族とともに家の下敷きになり多数の死傷者を出した。・住民は近くの小中学校体育館に避難したが、寒い中に電気、水道が使えず耐えるしかなかった。電気は2週間で復旧したが、水道は4月に本管が復旧、しかし、家までの配管が損傷し今でも使えない家もある。自治体職員も多数が被災し、役所の機能がマヒした状況にあった。救援の手が届かず体育館での避難環境があまりにも劣悪なため、金沢方面へ自力で行く人、二次避難所へ行く人がいたが、自治体もだれがどこにいるのか把握できない状況だった。個々の自治体の努力ではどうしようもない状況であった。 <p>●国、県の対応</p> <p>石川県の対応も不十分であった。国への支援要請もせず住民への支援が進まない状況が続いた。国の幹部も何度か被災地を訪れたが、空港から黒塗りの車に乗り、1～2箇所見て終わり。県知事も足を運ぶが限られた被災地のみ、被災者の声をしっかり聞けと被災者は憤慨している。県選出の国会議員の姿も見えない。ある被災した町の9月議会では、一般質問に誰も立たないというありさま。</p> <p>●仮設住宅</p>

	<p>仮設住宅も遅ればせながら建設されていったが、被災者が求める戸数には満たない状況。しかも、プレハブ造りでこの夏の酷暑では蒸し風呂状態。県産の木材を使った仮設住宅は全体のわずか0.2%分。もっと増やしてほしいと要請しても、あくまでモデル的なものという始末。</p> <p>●支援物資及び仮設住宅の取扱い</p> <p>県は一次避難所には支援物資を届けるが、仮設住宅入居者には支援物資は届けない。家が確保されたので、自力で確保するようと言う。仮設住宅の入居期間は2年間。その後は退去するようと言われるが、地震で家をなくし全財産をなくした被災者にどうしろと言うのか。そこに今度の水害の被害である。</p> <p>●水害の被害</p> <p>能登半島は、高い山が少なく一番高い山で500m、平均300m。地震で山肌が崩壊し、亀裂があり、川幅も狭いところに大量の雨が降り続いた。川があちこちで氾濫し大きな被害が発生した。</p> <p>●定期的に物資を届けている輪島市に住む高齢女性の様子</p> <p>地震被災後、子どもの家へ避難した。しかし、見知らぬ街で一日中家の中で留守番の毎日、2~3カ月が限界となり被災した自宅に戻った。水道がいまだ復旧しておらず、隣の集落まで自転車で水を汲みにいく毎日。電気は使えるが下水道は使えず、トイレは畑で済ませる。それでも、自宅がいいと言う。どんなに被害を受けても生まれ育った故郷にいたいと言う。</p> <p>●共同支援センターからの要望</p> <p>地震災害に加え水害被害の状況は、もはや、被災者の力だけではどうしようもないレベル。国をあげての支援をお願いしたい。今こそ、政治の力で救済してほしい。</p> <p>○輪島市周辺水害調査</p> <p>輪島市では、大雨により周辺の山々で土砂崩れが発生し、大木が根こそぎ倒れ大量の土砂とともに下流域に流れ、橋の欄干には大量の流木がからみ、川の流れをせき止めて床上浸水を引き起こしていた。市中心部では、地震の影響で道路の凹凸が残る中、腰の高さを越える浸水があり片付け作業に追われる様子があった。お宮の境内には、全国からのボランティアの拠点が設けられ、活動する様子があった。</p>
<p>所感</p>	<p>地震に加え水害に見舞われた被災地の様子は言葉にできないほどの甚大な被害であった。地震による倒壊、損壊家屋の棟数は想像をはるかに超える規模のものであり、解体作業がわずかに始まった段階であった。被災地へ向かう道路も7月ようやく仮復旧した状況である。</p> <p>外浦（能登半島の志賀町から輪島市、珠洲市にかけての日本海側）の海岸の隆起は主要産業である漁業の再開に大きな障害となっている。港の整備にどれぐらいの時間がかかるのか、農漁業の再開まではたしてどうやって暮らしていくのか。あまりにも甚大な被害を見て感じずにはおられない。まさに国をあげた復興の取り組みが求められる。</p> <p>日本列島が地震活動期に入っている今、いつどこで大地震が発生してもおかしく</p>

	<p>ない状況にある。住宅耐震化をはじめ能登半島地震の教訓を八女市における防災・減災に向けた取り組みに活かせるよう引き続き取り組んでいきたい。</p>
--	---



